

アイデンティティと方法——国際漢学とは何か——¹

柯 馬丁 (Martin Kern)²

佐竹 保子 訳

最初に、私の漢学の旅路を少し思い返したい。それは、交叉する複数の路だ。そのうちのどの一本も、あらかじめ計画したり予想したりしたものではない。

私の最初の旅路は、現代の中国で始まった。1987年から1989年まで、私は北京大学³で学んだ。最初は対外漢語センターで、ついで中国文学部で。その前は、ドイツのケルン大学で二年間漢学を学んでいた。

北京に来たのは、中国の現代詩を研究するためだった。詩人を何人か知っていたし、知的好奇心と実験精神に満ちた当時の雰囲気が好きだった。当時の北大では、幾晩も詩の朗読会が開かれ、何百人もの学生を惹きつけていた。けれどもその後、現代中国を理解するには、もっと多くを知らねばならない、中国の伝統を理解しなければならないと気付いた。こうして私は、六朝や唐代の詩に興味を持ち始めた。そして信じられないほど幸運なことに、袁行霈先生に師事し、教室や彼の自宅でその話を聞けるようになった。ケルン大学に帰って完成させた修士論文は、中国古典詩歌についてであり、おもに六朝詩歌に焦点を当

¹ 本論文の原文に注はなく、以下はすべて訳者が付した注である。

該論文は「认同与方法：什么是国际汉学」と題する中国語論文として、「国际汉学研究之回顾与前瞻」学会に提出された。「国际汉学研究之回顾与前瞻」は、2014年9月2日から二日間、中国の北京大学博雅酒店英傑月光庁で開かれた。著者の Martin Kern 氏については、本文に自己紹介があるが、注 2 も参照されたい。

訳者は氏とは初対面であったが、「认同与方法：什么是国际汉学」を9月1日夜に拝読し、訳者はもとより、それ以上に訳者の研究室出身の若い研究者たちと、問題意識を共有するところが多いことに気づいた。訳者は所論のすべてに賛同するわけではないが、ぜひ若い研究者たちに紹介したい文章だと感じ、9月3日、直接氏に日訳の許可を願い出た。氏は快諾されたのみならず、該論文の英語版を、メールで送ってくれた。

ここに発表する日訳は、中国語版と英語版の双方を参照している。とくに英語版に助けられたところが多く、氏には心から感謝している。

なお、中国語版の「国际汉学」は英語版では「International Sinology」であるが、学会の名称であったので、日訳でも「国際漢学」とする。「Sinology」「Sinologist」もすべて「漢学」「漢学者」と訳す。本論文に章立ては無かったので、読みやすいように、英語版、中国語版双方よりも改行を増やし、段落の切れ目と思われる所に空行を入れている。また、[] 内は、訳者が補った言葉である。

² プリンストン大学東アジア研究科主任教授。

³ 中国語版は「北大」、英語版も「Beida」である。Kern 氏はある種の懐かしさを込めて略称しているようである。拙訳も以下は「北大」と記す。

てたものだった。続いて、前漢の宗廟に捧げる頌歌についての博士論文を書いた。以来ますます時代を遡り、今や先秦文学が私のおもな研究対象だ。

私の二つ目の旅路は、ドイツで始まった。漢学を研究したのは、既知の事柄とはまったく違う何かを研究したかったからだ。そしてすぐに中国で研究したいと思うようになり、二年間の奨学金を得て北大に留学した。三年目まで延長することができたのだが、1989年6月4日以後、私は去る決心をした。続く七年間、私はケルン大学で修士論文と博士論文を書いた。その後1997年の1月1日に、ワシントン大学の康達維(David R. Knechtges)教授に師事するためにアメリカに赴いた。もともとの計画では半年か一年間のつもりだったが、結局17年後の今も、私はアメリカに居る。ヨーロッパに戻ろうと考えたことは二度あったが、二度ともアメリカに留まることに決めた。これが私の二つ目の旅路であり、新たな国と大学がそれを可能にした。私はドイツとアメリカの両方のパスポートを持ち、アメリカ、中国、日本、韓国、イタリア、イギリス、オランダの大学で講義をしてきた。

三つ目の旅路は、漢学から始まった。だが学生時代、私はドイツ文学と中国美術史とヨーロッパ美術史を副専攻とし、それは学位取得試験まで続いた。修士論文や博士論文では、ヨーロッパの学術伝統に属する方法論を用いた。それがごく一般的なやりかただったからだ。自身にとってもっとも重要なのは、中国の文学や歴史の細部であったし、きわめて伝統的な枠の中でこうした細部を探究していた。

近年、私の学生は世界各国からやって来る——中国からの多くの留学生を含めて——。私自身毎年何度も中国に行き、講義をしたり会議に参加したりするうちに、自分がもう一つ別の路を辿っていることに気付いた。私はもはや、中国を、中国研究の専門用語だけで研究することなど、想像もできない。中国の古典文学を理解するには、より強い相対的な視点(比較の視野)⁴を持たなければならない、と信じるようになっていく。

今なら私は、ドイツの著名な東洋学者でオックスフォード大学教授であるマックス・ミュラー(Max Mueller, 1823~1900)の言葉が理解できる。彼は宗教研究について次のように言った。「一つの宗教が分かっただけでは、いかなる宗教も分からない」。私にとってそれは、「中国文学が分かっただけでは、中国文学が分からない」ということだ。

私の三つの旅路がいかに交叉しているかをお分かりいただけたと思う。それらは、知的関与が不断に広がっていったことを物語る。私は依然ドイツの漢学者であり、すべての仕事の焦点は依然中国にある。けれども、最上の仕事をするためにはアメリカに行かねばならなかったし、研究においてはより相対的にならねばならなかった。もとよりこれらはす

⁴ 中国語版は「比較視野」、英語版は「comparative perspective」。comparativeは当然ながら「比較」と「相対的」の両義を持ち、その点を強調するために()を用いた。

べて選択であり、他の学者は違う選択をする。アメリカの同僚には、中国語以外の外国語が読めない人々がいるし、古代中国を他の文明と比較することに何の興味も無いと断言する人々すらいる。中国学の専門用語のみを用い、もっぱら中国の研究方法によって研究するのが最上だ、と信ずる人々もいる。こうした同僚たちがなぜ中国の同業者に人気があるのか理解はできるが、しかし、彼らにはまったく同意できない。

ケルン大学でのドイツ文学のゼミ「ドイツ古典」を、私はまだ覚えている。ゼミの教授は著名な老学者で、長大な必読書リストを学生たちに課した。その中の多くがドイツ語ではなかった。私は、典型的なドイツの詩人で劇作家で小説家であるゲーテの、もっとも良い伝記が英語で書かれていることを学び、我々の教授はそれを読むよう命じた。若い学生だった私は驚いたが、しかしすぐに理解した。ドイツ人だからといってドイツ文学への理解を独占しているのではないばかりか、そのための方法も所有してはいない、ということ。ゲーテに心酔してはいるけれども、自分がドイツ人だというアイデンティティは、そうした占有や所有には結びつかないのだ。

たしかにこれは、私たち世代のドイツ人が、純真無垢なドイツ・アイデンティティなるものを想定しがたいことと関わっている。それは多く、ドイツがナチスによって壊され汚されたということだ。同世代の多数と同じように、私はまず自分をヨーロッパ人と規定し、その後にドイツ人とする。渡米後最初に公刊した文章は、ナチスの時代に移住を余儀なくされたドイツ人漢学者たちの痛ましい物語だった。中国で文章を公刊する時は、名前の前に「徳」（ドイツ）ではなく「美」（アメリカ）と冠することも肯っている。

もとよりこれは、特殊なドイツ人の見方だ。しかしヨーロッパの他の国から来た同僚たちにも通ずるものがあるはずだ。私たちはみな、文化的政治的統一など昔から望んだことがない大陸、全ヨーロッパの共通性と同じくらいそれぞれの異質性を大事にしている大陸から、来ている。もっとも重要なのは、自分たちの国の伝統を何と呼ぼうと、それらが純粹に固有のものではないことだ。それらは、他者との多面的なふれ合いを通してのみ発現したのであり、単一文化の巨大な一枚岩ではなく、異なるヨーロッパ人たちの文脈の中でさまざまに共鳴する創造物として、すべてのヨーロッパ人に共有されている。それらは異なる場所でさまざまに解釈されうるし、そうされねばならない。そしてそれら異なる解釈すべてが相互に影響しあって積み重なっていくのだ。

この意味では、ゲーテ——彼はフランス語訳の中国小説を何冊か読んだのち「世界文学」なる言葉を我々にもたらした——は、ドイツ人であると同時に、あるいはそれ以上に、ヨーロッパ人である。ゲーテが官僚として生き働いたワイマールの宮廷では、公式言語がフランス語だった。過去二百年以上にわたる膨大な量のドイツ文学も、非ドイツ語の言語環境で書き上げられてきた。ドイツ人作家と作曲家は、全ヨーロッパで生き、働いてきたのだ。

中国の話に戻る前にかくも回り道をしたことを、お許しいただきたい。だがこれは、私の、中国文学への取り組み方を明かすものなのだ。私は信じている、文化の創造と解釈には単一性よりも多様性のほうが役に立つこと、「外から」の視点を、単に分かりにくいというだけで無視することはできないことを。内と外という二項対立がそもそも間違っている。『過去は異邦』という題の有名な本があるが⁵、その意味では、私たちはすべて異邦人だ。私たちのただの一人も、周代や漢代の中国語の母語話者^{ネイティブスピーカー}ではない。周王朝や漢王朝で、ただの一日も過ごしたことがない。私たちがなしうるのは、妥当で信じられ有用だと自分自身が思っている過去のヴァージョンを再構成することだ。だが、妥当で信じられるとは、誰に対して？有用とは、何にとって？ドイツの歴史学者レオポルド・フォン・ランケ^{リアル}の考え——「歴史記述は『それが現実にはどのようなであったか』を我々に告げるであらう」——が、19世紀ドイツ人の幻想に過ぎないことを、私たちは知っている。救いがたいおめでたさ無しでこうした見解に戻れる歴史学者など、今や存在しない。私たちは知っている。歴史を書くとはつねに、目下当今の利益に奉仕することにほかならず、それゆえ目的の異なり具合に応じて、同じ事件に多くの異なった歴史が存在しうること。

それでは、こうした異なる歴史は、いわゆる「国際漢学」なるものをいかに導き出すのか？「国際漢学」とは、単一の領域なのか？私には疑わしい。自身が研究している中国古代（すなわち周秦兩漢）では、異なり具合がとりわけ顕著に見える。近年「疑古の時代からの脱出」が始まる中、私たちはある学術潮流に出会うこととなった。伝統を問い質す代わりに、それを「信」じ「解」釈し、その「殷^{おお}いさを顕現させよと、私たちは告げられている。これは目的のある主張だ。信じられ、解釈され、壮麗さを顕現させるべきものは、伝統的な物語りの枠内にある、中国古代の栄光なのだ。

私は中国古代の栄光を疑っていない。中国古代を研究するのは、研究に値いすると認めているからだ。だが、自分の研究の目的がこれこれであるべきだと、人に言われるのは好まないし、いかなる形の研究にも不可欠のものとして「疑うこと」を大切にしている。懐疑を止めるのは、もっとも都合のよい物語りを受け入れることだ。それは怠惰であり、自分自身を懐疑する能力を失うことだ。

学生が論文を書く時、私は彼らに、彼らの主張とは食い違う証言を示すよう要求する。自分の未発表の論文を友達に見せる時は、どこが誤っているか指摘してくれるよう頼む。疑うことは、その対象が伝統であれ、都合よさであれ、私利私欲であれ、政治的利益への迎合であれ、あらゆる探索と発見の始まりだ。疑うことを願わず、信じ解釈したいとのみ願う人々は、学者ではなくキュレーター（管理者）だ。彼らはもっとも大切なものを守り

⁵ David Lowenthal の『The past is a foreign country』（Cambridge University Press 1985）。

たがる。彼らがなぜそうしたいのかは理解できる。今「国学」という観念でかくも雄弁に語られているように、それが国の利益になることも分かる。けれどもそれは、学者としての私たちを貶めることになる、とも思っている。国のアイデンティティを、学術的方法の上に置くことになるからだ。

とはいえ私を、中国の学者と西洋の学者という、怠惰な二項対立に陥らせてはならない。二項対立自体が間違っている。西洋の学者たちも、往々見え透いた目的のもとで働いていることを、私は渋々ながら認めなければならない。

誰でも知っている、中国の最良の学者気質は、鋭敏で何ものをも恐れず、孤立に甘んじていることを。〔他方、〕アメリカのテニユア制に馴染んでいる者は誰でも知っている。どれだけ多くの論文が、ただ単に教授職を手に入れるために書かれているか、また、若い学者たちがいかに、ジャーゴン（隠語めいた専門用語）の氾濫する特定のイデオロギーの需要を満たすべく駆り立てられていると感じているか、を。

西洋の学者も中国の学者も、自身の大学で成功するすべをよく知っている。本当は、学術機構や伝統の異質性ゆえに、「西洋漢学」なるものはもともと存在しない。ロシア、ドイツ、フランスの漢学の伝統はやや区別できるかもしれない。わが親友であるミュンヘン大学の Hans van Ess は、『古代中国の政治と歴史叙述』という 830 頁もあり、2,400 近くの脚注を擁し、そして漢語拼音ではなくウェード・ジャイルズ式表記法で中国語の発音を記した大著を、勇敢にも公刊した。私たちは微笑して「とてもドイツ的だね」と評した。ドイツ語で書かれているからだけではない。世界中でごく少数の学者からしか読まれないだろうからだ。私自身の 1997 年の博士論文を見ても、私は「とてもドイツ的だ」と評して、自分の学生たちにはこうした形の論文を書かせない。それがアメリカで若い学者たちを審査する際のすべての基準に反しているからだ（アメリカでは、私のようなヨーロッパ出身者だけが、こうした論文を書くことが許される）。逆に、アメリカの博士論文の多くは、その人がヨーロッパで研究職を得る助けにならない。要するに、私たちは皆、自分の属する学術団体の期待に向けて書いているのであり、皆、異なる種類の圧力に屈従している——ちょうど中国の若い学者が、伝統的な物語りの枠内に留まらねばと感じた時や、外国での方法や問題を無視しても安全であると知った時に、そうするように。私たちは皆〔そうやって〕相応の見返りを得ている。

学術伝統が異なるから、追求する研究対象も異なってくる。中国での古代文書に関わる学会では、二つのテーマだけが重要だ。思想史と文字学である——未知の古代漢字についての議論ほど興奮をよぶものはない。〔だが〕あなたがドイツ人学者——アメリカで教えているドイツ人学者を含む——の発言に耳を傾けるなら、関心の所在がいくぶん異なることに気付く。たとえば、写本の物理的な形態についてや、異なる筆記者による「字体」、文の区切り方、修辞構造、テキストの複合状態やその出所の多様性、そして文書と口語と

の関係など。だが、こうした問題のほとんどは、おもに思想史、すなわち「哲学」に焦点を合わせるアメリカの古代中国研究者には、馴染みがない。

だから、文献学を重視した『Handbook on the Study of Chinese Manuscripts（中国文書研究入門）』の編纂を試みた時（友人であるオックスフォード大学の Dirk Meyer やチューリッヒ大学の Wolfgang Behr とともに）、私たちはおもにヨーロッパからの寄稿に頼った。しかし、Stephen Owen と孫康宜が『Cambridge History of Chinese Literature（劍橋中国文学史）』（イギリスで出版された）を編纂した時、その傘下に入ったのはほとんど（現代文学についてのきわめて短い一章を除いて）アメリカで仕事をしている学者たちだった。いまドイツで中国古典文学を講じている唯一の教授は、北京大学から修士号を、プリンストン大学から博士号を取得した楊治宜だ。このように、私たちの前にはたくさんの異なる「西洋漢学」がある。アメリカ国内でさえ、方法論や取り組みかたは学派によって大きく異なっている。

『劍橋中国文学史』、その第一章は私が書いたのだが、この本は「国際漢学」についてもう一つ興味深い話題を提供してくれる。英語版が出た三年後の 2013 年に中国語訳が公刊され、一年間で 2 万部以上も売れた。私は多くの中国語の書評をネットで読んだし、編集者である北京三聯書店の馮金紅と、中国人読者の反応を語り合いもした。総じてこの本は、とても歓迎された。事実誤認があるとして個別的に批判された章はあったけれども。

だが、もっとも興味深い批評は、全然別のことだった。中国人の同僚の幾人かが次のように不平を鳴らしたのだ。「残念ながらこの本は、真に新しく異質な形で中国文学史を記述してほしいという我々の期待を裏切っている」。換言すれば、我々アメリカの学者は、あまりにも伝統的保守的でありすぎ、それゆえ徹底的に異なった視点から中国文学の伝統が見直されることを期待していた中国人読者たちを、裏切ってしまったというのだ。

これは複雑な事態だ。まず第一に、私はこうした期待をとても嬉しいと思う。彼らは私たちの仕事に心から関心を寄せてくれているのだから。だが第二に、上記の批評はそれ自体伝統的で保守的だ。それは、西洋の学術と中国の学術という古くさい（そして誤った）二項対立に固執している。そして第三に、そこには興味深い誤解が見て取れる。

というのも『劍橋中国文学史』の著者たちは、中国の読者層のためではなく、西洋の読者層のために書いている。そこには、中国研究とは何の関わりも無い読み手が沢山含まれる。本の目的は、そうした読者たちに、信頼できてバランスの取れた記述を提供することであった。私は割り当てられた章を、もっと革新的に書き、自らの急進的な解釈を提示してもよかったのだろうか？もちろん、よかった。だが、私は専門家のために書いていたのではなかったし、何か「異質なもの」を期待する中国の専門家のために書いたのでもなかった。

このことは、私たちを基本的な問題へと導き入れる。つまり「国際漢学」という仮想の領域の読者についての問題である。誰のために、私たちは書いているのか？ここまでの発言から答えはお分かりだろう。私たちは皆——中国であれ他の場所であれ——私たち自身の読者のために書いている。これらの読者たちを、私たちは知っている。彼らの期待も、彼らの前提条件も知っている。そして知識と理論を共有する基盤の上に立って、議論を進める。中国学以外のさまざまな領域から著名で影響力のある西洋の学者たちを引用する時、私は読者と共通の基盤の上に立っている。ヨーロッパやアメリカの思想の引用は、賢明で肯綮に当たってさえいれば、有益で啓発的だとみなされる。引用された著作をよく知らない読者もいようが、しかし彼ら自身が、自分はそれを知るべきで、知れば教養が高まると信じている。文化理論についても同様である。西洋の読者にもそれらをよく知らない人がいるだろうが、しかしそれらはすでに私たちの人文学の伝統の一部となっているから、知っておくべきものなのである。

こうした相互の期待や理解という安定した基盤の上でこそ、私は自分の仕事をすることができる。人文学の伝統を担う熟語によって、私は読者に語りかける。文学の作者は「意味増殖における節儉の原理」(the principle of thrift in the proliferation of meaning)である、というフーコーの言葉を引用して、作者という形象はテキストの源泉ではなく、テキスト解釈の一機能である(フーコーのいわゆる「作者機能」(author function))、と語りかける時、人は私の分析に不賛成でも構わないが、しかしこの観念もそれを表現する言葉も未知なるものではない。

けれども私がそれを中国語で語るや、それはまったく未知なるもの、晦渋なもの、場違いなものに響く。私の分析は、何かしら中国的でなく、それゆえに——ある学者たちの目には——中国文学を理解するのに何の役にも立たないものとなる。

この例の示す事実はとても単純だ。私たちは同じ言葉を話していない——私が英語を、あなたが中国語を話しているという意味ではない。もっと深い意味で、私の学術共同体には共有されているが、あなたのそれには共有されていない、異なる知的熟語を話している、ということだ。これこそ、西洋漢学のあまたの著作、とりわけより面白い著作の中国語訳が、失敗を運命付けられている理由である。私たちはある言語を他の言語に翻訳できる。しかし学術共同体の知的慣習や伝統は、たやすく翻訳できない。西洋の著作の翻訳が惨憺たる中国語に聞こえるのは、翻訳が悪いとか硬いとかのためではない。もとの言語では完璧に明晰で分かりやすい内容が、訳された言語では著しく未知なものへと変貌するのを免れないからだ。しかも、言葉が惨憺たるものとなるばかりか、表された考えそのものも惨憺たるものとなる。それが、中国の分析の伝統に含まれていないからだ。それゆえ多くの人々の目に、中国文学を理解するのに不適切で、役に立たないと見える。

かつて中国人の友人に言ったことがある。「中国古典について書くために、まだ中国語の中には無い新しい語彙表が欲しいよ」。友人は怒り出した。彼は答えた。「中国古典は

今ある中国語の語彙で完璧に議論できるさ」。ああ、そうとも。でもそれでは私の議論ではなくなる。そしてもちろん、新しい言葉は、どの言語でも不断に創られ続けている。たとえば、1980年以前の中国語に、^{テキスト} 文本という言葉が存在したとは考えられない。

はっきりさせておこう。中国について書く時、私は中国の読者のために書いているのではなく、中国の学術伝統の枠内で書いているのでもない。結果として、私の文章は中国語では異質なものとならざるを得ない。私は西洋の読者のために書いている。そしてもっとはっきり言えば、英語の時と中国語の時とでは、私は全然異なって話している。同じ事柄を話せないほどで、さもなくばまったく奇怪に響く。理由はほかでもない。過去数十年間、中国と西洋の漢学研究は、近寄るところか、逆にますます遠ざかっていったからだ。

それでは、誰が私の読者なのか？第一には、仲間の西洋の漢学者たちである——彼らが私の説に同意していると否とにかかわらず。だがたぶん、より多く、私は人文学の他の領域の同僚たちに語りかけている。私が主任を務めているのは「東アジア研究科」である。それはおもに、中国・日本・韓国の歴史と文学と言語をカヴァーしている。類似の学科がヨーロッパじゅう、北米じゅうにある。東アジア研究科は、真空中に存在するのではない。私たちの大学の一部であり、私は自分たちの仕事の重要性を、他の領域の同僚たちに、行政機関に、説明できなければならない。北米の大学で一つの領域として生き延びるために、漢学——すなわち、前近代中国の文献学的歴史学的研究——は、人文学の近隣諸分野と連携できなければならない。私たちは、中国古典がなぜ研究に値するかを、説明できなければならない。つまりは、同じように知的で方法論的な言語を話せなければならないし、中国と他の古典文明とを比較して同異を見出せなければならない。さもなくば、私たちは語るべき何もも持たぬまま、自らを周縁に追いやる⁶という深刻な危機に陥る。

西洋では、人文学一般の中に統合できない漢学という領域は、その存続すべき理由を主張し難い。端的に言って、国際化した学術世界や学術機構において、漢学はそれ自身で存在することができないし、それ自身の専門用語や方法論だけで研究を展開していくこともできない。あたかも別の宇宙に存在するかのように振る舞えない。21世紀の漢学研究者とは、中国研究を人文学一般と対話させる存在だ。それができなければ、私たちの領域は生き延びることができない——実際、生き延びるべき理由もない。

だがなぜ私は、自分の仕事を中国語で示す時、同じ知的言語を話すことができないのだろうか？ここで私は、残念ながら一つの単純な事実を指摘せざるを得ないようだ。中国では不幸なことに、海外の漢学の受容が、翻訳ですら極端に制限されている（『劍橋中国文学史』はメジャーな例外だ）。漢学の中のすべての領域がそうではないのかもしれないが、

⁶ 中国語版は「自我邊緣化」、英語版は「self-marginalization」。

私が従事している領域は間違いなくそうだ。非中国的な方法論がまともに議論されることはない。西洋の主要な雑誌や本が広く入手され読まれることもない。

もとより私は理解している。中国で学術的なキャリアを積む若い学者は、職や昇進のために外国の漢学に注意を払う必要がないことを。しかし一方、海外での経歴や西洋の一流誌への論文掲載にはそれなりの見返りがある。あいにく空手では得られない。[だが]中国の若い学者が北米の大学に訪問学者の申請をしても（申請は毎日ある）、そこで行われている研究に無知であれば、彼はふつう即座に拒絶される。もし『通報』という、1890年来西洋随一の漢学雑誌に論文を発表しようとしても、西洋の学術に無知であれば、その論文は採用されないだろう（こう言えるのは、私とその雑誌の三人の共編者の一人だからだ）。

長い目で見て、こうした状況は私たちすべてを損なう。私たちの領域を推し進め強めたいと願うならば、私たちは互いに協力する必要がある。私たちすべてが知り合い、共通の言葉話す、本物の国際漢学を造りあげる必要がある。

思うにそれは、中国研究の単なる中国版であってはならない。それでは国際的な人文学と連携することができないから。もちろん、中国研究の中国版は、中国では存続できよう。中国は大きく、数え切れない大学があり、そして地球上のほかの国々とまったく同じように当然ながらその輝かしい過去を尊重している、というだけの理由でならば。けれども、国際的な人文学に加わるためには、中国漢学は、単に中国の文化的アイデンティティという目的にのみ奉仕し自身の方法論にのみ固執することはできない。批判的に世界に関わり、本質的に相対的になり、方法論をアイデンティティの上に置かねばならない。

数年前、香港の学会で、古代中国文献研究の方法論上の問題点について話した時、一人の学者が叫んだ。「方法！何の方法か！我々は方法を語る必要なぞない、研究をすればそれでいいのだ！」。これは誤解だ。実際には、意識すると否とにかかわらず、誰でも方法を持っている。「私は何の方法も用いない」ということ自体が、一つの方法だ。そして自らの方法への理論的な反省を拒むことは、その方法の囚人^{とらわれびと}となることを意味する。

しばしば耳にするもう一つの見解は、中国はそれ自身の熟語で研究できるし研究すべきであり、外国の方法も理論も、比較の視点も、中国には無関係だと考えられる一連の論点も、必要ではない、というものだ。しかしここでも、私たちは苦境に陥ってしまう。それらすべてを拒むことは、古代中国文明が完全に例外的で、他の古代文明と比較できないことを意味する。かなり粗雑で観念的な見解であることに目をつぶっても、これは、私たち中国学研究者が他の領域の同僚たちの仕事から何も学べないという——漢学の全歴史に矛盾する——主張にほかならない。私たちはいつも、非中国的な観念を用いて中国を考えてきたし、それらの観念の多く（たとえば、民間文学や宗教学や、近年の「^{テキスト}文本」）は、中

国でも海外の学术界でも安定した位置を得ている。直接的にも間接的にも、私たちはすでに、他の文明の研究から大量の熟語と観念を取り込んでいる。

一番重要なのは、しかし、別のことだ。もしも本当に中国が例外すぎて、他の前近代文明の研究には通用する方法や理論が、中国の歴史・言語・文学・哲学・宗教・芸術等々の研究に役立たないのであれば、逆もまた真である。中国研究の方法が、中国にのみ有用で、他の文明の研究にまったく役に立たないことになる。私たちが中国研究から何を得ても、人文学の他の領域には何の関係も無く、何の影響も及ぼし得ないということだ。だが、本当にそうだろうか？

私は思う、こうした考えは明らかに自らの足元を掘り崩すもので、^{ナショナリスト}民族主義者の感傷に駆られている中国の漢学研究もそうである、と。その参照範囲が国境に限られるからだ。自己中心主義になればなるほど、海外の漢学は中国の学術から離れざるを得なくなる。自身の組織や世界の学術団体において、私たちは他の領域の同僚たちと生産的に語り合えなければならないからだ。私たちはまた、他の領域から得られるインスピレーションを当てにしている。それによって、私たちのやり方では見出し得なかった新たな問いを問うことができるからだ。

ヨーロッパ各国の文学が今いかに研究されているかを見れば、即座に、さまざまな領域すべてが理論と批評方法の基盤を共有していることが分かるだろう。フランスの文学理論と哲学は、ドイツ文学の研究に有用で、逆もまた真である。ミシェル・フーコーはフランス文学にだけ、ローマン・ヤコブソンはロシア文学にだけ、ウンベルト・エーコはイタリア文学にだけ、ヴォルフガング・イーザーはドイツ文学にだけ適用されるべきだなどとは、誰も主張しない。そんな主張は、いかなるヨーロッパ人も狂気の沙汰とみるだろう。国民文学のいかなる領域も、それぞれの国の学者やキュレーターによって所有されたり支配されたりはしない。すべては、人文学が学び探究してきた共通の努力の一部分だ。どの国の学術伝統も、固有の哲学的批判的思惟の宝庫を作りだしてきたし、それらの宝庫は、すべて開け放たれている。だが漢学者としての私は、次の明白な事実を見逃すことができない。中国の外では誰も、中国の哲学や批判的思惟によって非中国文学を説明することがない。中国文学の豊かな伝統——世界でもっとも古くもっとも大きな伝統の一つ——が生んだいかなる解釈理論も、中国の外では参照されることがない。

もちろん、原因は一つに止まらない。個人的な経験から言えば、西洋の文学研究者たちはずっと、自分自身とその考え方にあまりにも自己満足しすぎてきた。だが今、西洋の大学の知的動向は、急速に変化している。数十年來漢学者が他の領域の同僚たちに無視され続けたとするなら、今や、自分たちの見方を人文学に持ち込むことがますます期待されつつある。同僚たちは、中国について学びたいと渴望している。中国についての知識が、彼らの相対的思考や研究に何ものかをもたらすからだ。これはチャンスだ、と私は強く感じ

ている。

中国の伝統は、かくも多くを提供できるのだ！『紅樓夢』を語らずしてヨーロッパの小説が語れようか？唐詩を語らずして世界の詩歌について語れようか？西洋の理論家や哲学者たちは、中国思想の基本を知るだけでいかに多くを得ることか。教養ある西洋人が『論語』を読んだことがないという事態を、どうして容認できよう。

ここにこそ、こんにちの漢学者が担うもっとも重要な任務がある。研究は当然だが、それに加えて私たちは、中国文化を他者にいかに説明するかを学ばねばならない。もとより国際漢学——世界の人文の熟語を話し、その観念を共有する漢学——だけがこれを成し遂げられる。中国の独自性を指摘したいと願う場合でさえ、私たちはまず、中国の外を理解しなければならない。さもなくば、何が独特であるかをどうやって知ることか？〔冒頭部分に挙げた〕マックス・ミュラーの言葉に戻ろう。「一つが分かっただけでは、何も分からない」⁷。

もし私たちの目標が、中国の偉大さを自身に語るだけのことなら、私たちが得るのは自己満足的な一国の漢学でしかない。だがそれは、私たちの目標にはなり得ない。中国の人文の宝庫を世界にもたらすこと。それが私たちの希望、私たちの責務だ。実際、現実的に漢学が生き残る選択肢はほかにない——西洋でのみならず、最終的には中国でも。真の国際漢学だけが、国際的な人文の中でしっかりと立つことができる。ちょうどイギリス、フランス、ロシア、ドイツの歴史や文学の研究が、ずっと真に国際的なものであり続けているように。真の国際漢学は、私たち皆に多くを求める。お互いの最新の業績を、翻訳ではなく原文で読むこと、そしてお互いに批判的かつ自己批判的に関わり合うことをも含めて。

いつの日かこれが成功したら、ドイツ文学の研究者たちが、ゲーテをよりよく理解するために、私たちの唐詩の共同研究に参入するだろう。死海文書の研究者たちは、古代聖書写本の研究方法を磨くために、中国出土文献の研究に参入するだろう。

このどれも、たやすく実現しはしない。しかし、もしも実現することを願いさえするならば、今が、始めるのに最適の時だ。自身の漢学の旅路にあって、私は感じている。今やっと一歩を踏み出した、と。

⁷ 中国語版は「只懂一門宗教，說明不懂任何宗教」。英語版は「to know only one is to know none」。後者に合わせた。ただし本論冒頭部分に記されたミュラーの言葉は、中国語版が「只懂一門宗教，說明不懂任何宗教」、英語版が「To know one religion means to know none」である。

⁸ 中国語版は他と同じ字体で「直接閱讀」。英語版は斜体の「in the original language」。後者に合わせた。